



「見たり、聞いたり、探ったり」No.309

通算 No.460

青木行雄

「一世を風靡した、大歌手」

「橋幸夫」氏の告別式

2025年9月4日に肺炎で他界、82歳。

橋幸夫氏、ミュージシャン。俳優でも活躍した。舟木一夫、西郷輝彦とともに「御三家」と呼ばれ、一世を風靡した。

橋幸夫氏は東京都の出身で、高校1年生でレコード会社のオーディションに合格し、1960年（昭和35）、17歳の時に「潮来笠」でデビューした。この曲が大ヒットし、日本レコード大賞の新人賞を受賞し、その年の紅白歌合戦にも初出場して、一躍人気歌手となった。

橋幸夫氏は、1943年（昭和18）東京都荒川区で呉服屋の9人兄弟の末っ子として誕生した。中学2年生の時、作曲家・遠藤実氏に師事。高校1年生の時、ビクターのオーディションに合格し歌手としての活躍が始まる。

このように歌手として、大活躍された、橋幸夫氏が、2025年9月4日風邪をこじらせ、肺炎となり、残念ながら、生涯の幕を閉じることになった。

葬儀と告別式は東京都文京区の浄土宗無量山伝通院にておごそかに開催された。

ある作曲家と関係があって、私も参列することになり、9月10日伝通院に参上した。

葬儀委員長、夢グループ代表の石田重廣氏が務めた。

そして下記はお悔みの挨拶文としてビクターより発表された。



伝通院の門前。6m程の立カンバンが見える



伝通院の葬儀場の本殿が見える



テントの中に生花が無数に並んでいる。受付けには人は少ないがテントの中には多勢の人がいた。



2～300人入るテントの中で大雨に見まわれ床に水が入って来て、大変だった。



葬儀場の飾り付け。熱海の自宅から見える富士山の風景を見た所を作ったという。



式場の中を写す。参列者の皆様

2025年9月10日 お悔やみの挨拶

弊社専属歌手の橋幸夫さんが2025年9月4日享年82歳にて逝去されました。

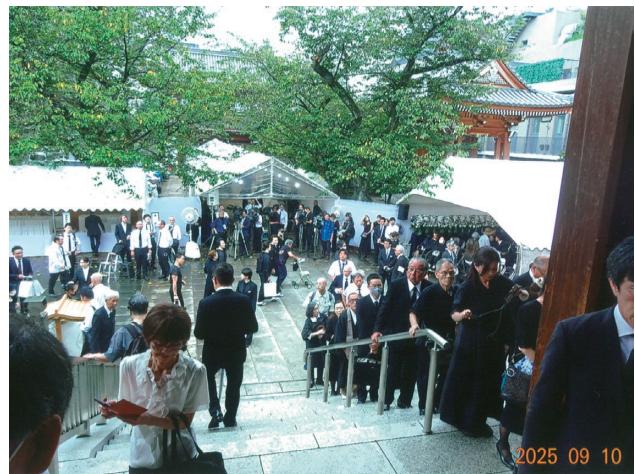
橋幸夫さんは1960年7月5日、シングル「潮来笠」でデビュー、同曲の爆発的ヒットで日本レコード大賞新人賞の第1回受賞者となり。その後も、吉永小百合さんとのデュエット「いつでも夢を」と「霧氷」で2度のレコード大賞を受賞するという、今の時代では考えられない快挙を連発されました。

そして、橋さんを長男として、当時の人気者の舟木一夫さん、西郷輝彦さんらと共に『御三家』という言葉を産み、熱狂的な人気を集めています。その後も「恋のメキシカン・ロック」「子連れ狼」など数々のヒット曲で、国民的歌手として不動の地位を確立。まさに日本の歌謡史そのものと言える存在で、その澄んだ歌声と、人々の心を包み込む温かな笑顔は、戦後の日本に夢と希望をもたらし、昭和・平成・令和を通じて歌謡史に燐然と輝く足跡を残されました。

弊社にとりましても橋さんは単なる所属歌手ではなく、レコードの時代から、ビクターの歴史そのものを共に築き上げてこられた大切な存在がありました。常に歌に真摯に向き合い、今年の4月にも81歳で新たにレコーディングをした、ニューシングル「絆」を発売し、全国各地で歌ってゆきたいと意気込ん



伝通院の表入口一般の参拝者も見られる。



告別式に参列者大雨の後の風景

で頂いていた最中で残念でなりません。

これまで本当にありがとうございました。

橋幸夫さんが遺してくださった184枚のシングルとその他の楽曲たちは、これからも永遠に歌い継がれ、世代を超えて人々に夢と幸せを与え続けるでしょう。

生涯現役の歌手活動お疲れ様でした。どうか安らかにお眠りください。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ピクターエンタテインメント スタッフより。

ファンもかなりの人数だったが、告別式の当日大雨に見まわれ、200人程もいるテントの中は雨水が入り、大変だった。20分程で雨も上がり、天気になったが、近くの春日町まで来ると雨はゼンゼン降らなかったと言う。伝通院の近くだけ大雨だったようである。

人生みんな誰でもかならず終焉はある。どんな有名な人も、そうでない人も。こんな事を考えながらあの会場にも流れていた「潮来笠」の歌詞を思い出しながら「志」のお返しの手箱をお受けし、伝通院を後にした。

記 令和7年9月20日